

あとがき

「外食産業」という言葉は、いまだ日本では耳新しい用語であり、一九七〇年代初頭にファーストフードやファミリーストラン等の大規模チェーン企業が登場するに及んで初めて使われ始め、七〇年代後半から急速に一般化したものとされる。しかし、この用語が普及してくると、それ以前に使用されていた「飲食業」という名称が廃れて、いわゆる「生業的飲食店」までも含めて「外食産業」と呼ぶ用例が出てきたこともまた、専門家の認めるところである（原勉・稲垣勉著『フードサービス産業界』）。

本書が副題を「第三世界の外食産業」とするのは、まさにその広義の用例に属するものである。すなわち、およそ家庭以外の経済活動をとまなう飲食行為すべてを考察範囲とすることを各執筆者に要請して、本書が編まれた。「屋台からコングレロマリットまで」を合い言葉に、第三世界の人々の外食のありようを、現地生活の体験を持つ研究者の眼を通して、供給・需要の

両側面から描き出してみようを試みたのである。

食することは、人間にとっては生きるために不可欠な個人的営みであると同時に、すぐれて社会的な営為の側面をももっている。属する社会、風土に根ざした食生活のうち、「外食」に焦点を合わせて見たとき、その民族や宗教によって異なる伝統的な規範性もおのずから現れ、また急速な都市化や生活の近代化がもたらした変化や多様化についても明らかにされている。

なお本書は、さきに『アジ研ニュース』第一二〇号（一九九一年一・二月合併号）が「第三世界の外食産業」のテーマで特集を行ったとき参加した三二編を各執筆者が加筆改稿のうえ、さらに新規執筆分を加え、全四〇編として成立したものである。同様の経緯で「はかり」「こよみ」「すまい」「のりもの」と、すでに刊行されている「アジアを見る眼」シリーズのなかの「くらし」系列の五冊目にあたる。

新規執筆の八編は、次のとおりである。中国・早瀬、アルジェリア・宮治、ナイジェリア・望月、ケニア・丹埜、ペルー・遅野井、ロンドン・浜渦、パリ・岩崎、日本・大岩川。

また『アジ研ニュース』読者からの要望もあり、取り上げた第三世界三六カ国について、いくつかの設問によるアンケートを実施し、一覧表として巻末に付することとした。これについての解説は省略したので、本文を参照しながら各国比較の手がかりとしてお楽しみいただければ幸いである。

おわりに、第三世界の人々の「くらし」の諸相を探るこうした試みが五冊目にまで到達し得たことは、ひとえに読者の方々が示したくださった好意ある関心と、それに励まされた執筆者諸兄弟および単行書制作担当者の熱意によるものであることを顧みて、心から感謝したい。

一九九二年一月

岩崎 輝行

大岩川 嫩

アジアを見る眼

「くらし」シリーズ既刊案内

〈B 6 変型判〉

70 「はかり」と「くらし」 第三世界の度量衡
小島麗逸／大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

73 「こよみ」と「くらし」 第三世界の労働リズム
小島麗逸／大岩川嫩編 ●日本図書館協会選定図書

78 「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題
堀井健三／大岩川嫩編

80 「のりもの」と「くらし」 第三世界の交通機関
吉田昌夫／大岩川嫩編

85 「たべものや」と「くらし」 第三世界の外食産業
岩崎輝行／大岩川嫩編

発展途上国のくらしに根ざした度量衡の多様な実態を、三十数名の地域研究者が体験的に論じ、解明する。第三世界の地域理解に必須の手引である。写真・図版多数。一九八六年刊

一九八七年刊

伝統的な途上国の庶民の住居は、近代化の波に洗われて変貌しつつある。都市のスラムに農村の集落に、その多様な実態を国別に浮き彫りにする。

一九八九年刊

ベチャから飛行機まで――途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する35編。

一九九〇年刊

民衆のエネルギーの源泉である食の世界を、「外食」のありようから楽しくそして鋭く描き出す四〇編。途上国理解にも旅行者のハンドブックにもすぐれて有用。

一九九二年刊

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにあり、これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々發展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があって、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七十年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東畑 精 一